花瓶の君

花瓶の君

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19401981

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 緊縛, 人間花瓶, 本番無し

エク霊で緊縛、人間花瓶です。本番無しです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

花瓶の君

マンネリ、じゃないけど。
俺はこの自分より年上の——ざっと４００年？ほど——恋人が、こういうこともできるのか、試したくなってしまった。
「なあエクボ、お前さ、縄で縛るのとかってできる？」
借り物の身体で、俺のタブレットで漫画を読んでいたエクボの手が止まる。
「できる」
酷く真剣な声でぽつりと返してきて、どきりとした。
「でき、るんだ。一度縛られてみたいかな、なんて、はは……」
俺たちは付き合い始めて５年が経っていて、大抵のアブノーマルなプレイは試してみていた。エクボの豊富な知識と経験で、そのことごとくが、その……めちゃくちゃ気持ち良かった、ので。
「いいのか」
エクボはタブレットを置いて、真っ直ぐに俺を見つめてきた。
「縛られてる間は、本当にみじろぎもまともにできねぇぞ。お前が思ってるよりも、縛られるってなぁ怖いことだ。それこそ俺様がお前に何をしても、抵抗できないんだぞ。俺様に、全てを委ねても、いいのか」
ドキドキと心臓がときめきで跳ねていた。エクボがこんな真剣な顔で何かを言ってくるのは久しぶりで、その男前な顔にきゅんきゅん身体のあちこちが疼いてしまっていた。
「い、いいよ」
「……なら、準備する。２週間後の定休日、１日空けとけ」
「わ、かった」
エクボはタブレットで何やら調べ物や買い物をしはじめた。
俺はパソコンで見ていた、扇情的に縛られている女性の画面をそっと閉じる。
何故か、これは不純な気持ちで見るものじゃないのかもしれない、と後ろめたくなってしまったので。

※

２週間後。俺とエクボはＳＭプレイができるラブホに来ていた。
「滑車が無いと完璧には出来ねぇからな。こういう部屋でないと吊りが出来ねぇ」
そう言いながらエクボはタッチパネルで部屋を選ぶ。
俺はいつものグレースーツで来ていたが、エクボが濃紺の着物に羽織りを着てきているのが、気になった。
「なあ、俺、着物とか持ってきてないけど……」
ネットでみた画像は着物の女性ばかりだった。こんな吊るしのスーツでもいいものなのだろうか。
「かまわねぇよ。緊縛ってのは何着て縛るかじゃなくて、誰が縛って、誰が縛られるかだからな」
「そ、そうなんだ……」
エクボは大きなトートバッグを持ってきている。
「後ろは洗ってきてくれたか？」
「う、うん……」
ラブホのエレベーターの中で、縛られるための準備の話をするのが、妙に気恥ずかしい。
これまでそれこそ何千回と身体を重ねてきたのに、こんなに真剣なのを隠さずに俺を抱こうとするエクボを見るのは、初めてなせいかもしれない。

部屋について。

人が入る鳥籠があったり、磔代や手足枷がついているベッドに目を白黒させていたら、エクボにぐいっとあごを掴まれて、そっと口付けられた。
「今日はあれらは使わねぇ。使うのは縄と、滑車と、この花だけだ」
トートバッグから、小さな花がいっぱいついている、白いカスミソウと黄色いミモザの花束が出てきた。
「じゃあ、始めるな」

エクボがベッドに上がって、足元でしゃんと正座したので、俺もつられてベッドの頭側で正座する。
「本日は、畏れながらわたくし縛師エクボが霊幻新隆様を縛らせていただきます。誠心誠意奉仕させていただきますので、どうぞご安心ください」
そう言ってスッとエクボが座礼したので、俺も慌てて頭を下げる。
「よ、よろしくお願いします」
スッとエクボはトートバッグから赤い縄を取り出す。
「こちらの縄は、専門の者が仕立てた物を、私が丹精込めて仕上げた物です。冷水で締め、ケバを一つ一つ、貴方の事を想いながら
切っていきました」
くら、とめまいがしてくる。俺に敬語のエクボ、破壊力がすごい。
「あ、りがとう……ございます」
「では、始めさせていただきますね。こちらをどうぞ」
エクボは真っ白な盃に、香水みたいな綺麗な小瓶から透明な水を注ぐ。
「これは調味山から汲んできた水を清めたものです。どうぞこちらを飲んで、気を身体に落ち着かせてください」
おれはそのよく冷えた水をおしいただく。
いつの間にか喉がカラカラになっていた。水は俺の喉を潤して、気持ちを落ち着けてくれた。
「それでは、失礼します」
エクボは躊躇なく俺のズボンを脱がす。下着も脱がして、手早く畳んで置いた。お前いつも適当に床に投げるクセに、やろうとすればキチンとできるんじゃねぇか、このやろ。
「では――縄をかけます。心臓がバクバクいったりしたら、すぐ言ってください」
「わ、分かった」
今の時点でかなりどきどきしているが、それとは違うのだろう。
しゅる、と胸に縄をかけられて。
どくん、と心臓が痛いほど跳ねた。
――あ、これ。
――――――――――怖い。

しゅるしゅるとエクボは慣れた手つきで俺の手を上に固定する形で上半身をどんどん縛っていく。
「本日は両手上げ縛りにさせていただきます」
「え、エクボ」
声を出すと、泣きそうで、情け無い。
どんどん肺すらも自由に動かせなくなって不自由になっていく身体に、泣きそうになっていた。
「こ、怖い。怖いよ、エクボ」
「──霊幻」
一旦手を止めて、エクボが正面に回ってぎゅっと抱きしめてくれた。
「大丈夫だ。お前を縛ってるのは俺様だ。俺が縄でお前を抱き締めてるだけだ」
「エクボが……縄で」
「そうだ。俺様の執着がお前を、縛ってる」

それって。
愛じゃん。

そう思うと、ふっと恐怖心が消えて、ぴりぴりとした心地よさが身体に走り出す。
「ぁ……っ？なんか、気持ちい……」
「お、縄酔いだな。なかなか味わえないんだぜ。お前縛られる才能あるな」
なんだそれ。そう言いたいが、全身に縄から絶頂した時のような甘い痺れがジンジンと広がり続けて、俺は喉を逸らして「嗚呼」と声を漏らしてしまった。
エクボに縛られていく。エクボが丹精込めた縄で、エクボの執着に浸っていく。……たまらない。丁寧なエクボの手付きに、いつもはあらわにしてくれない、エクボからの愛情を露骨に感じる。
嗚呼。
もっと、エクボの好きにして欲しい。
「……上半身は縛り終えました。次は左脚を吊って、花瓶になって

いただきます」
「は？」
戸惑うが、もう上半身は首以外はピクリとも動かせない。
エクボは手早く左脚を縛り、縄を滑車にかける。
「吊るぞ、気を付けろ」
「へ？」
ぐい、とエクボが縄を引いて。
「あ―――ッ♡♡♡♡」
ぎゅうと縄を通して全身激しく愛撫されたおれは、ぴゅく、と精液を溢した。
「な、に、これぇ……」
「気持ちいいだろ？」
「ヤバ、ぁ……えく、きす、して」
おおせのままに、とわざとらしく丁寧にエクボは縄を固定してから俺に優しく口付けてくる。なんだか訳が分からなくなってきて、涙がぽろぽろ落ちてきた。
「落ち着け霊幻。縄は結界だ。お前の魂を、お前の身体に自然に馴染ませてくれる。大丈夫だ、大丈夫。本来のお前に戻っていくだけだ」
エクボ、エクボ。怖いよ、俺ってなんだけっけ。
「……ほら、見てみろ」
エクボはデジカメで俺を撮って、見せてくれる。
「綺麗だぜ、俺様の霊幻」
縛られた俺は、別人みたいに艶やかで。
そっか。
俺って、エクボの恋人だったんだな。
そんな当たり前のことをしっかりと思い出させてくれて、多幸感が全身を満たした。
「ぇく、ぼぉ……っ♡」
「うんうん。お前見事に縄がキマってくれて、俺様冥利に尽きてる」
エクボも嬉しそうだ。ますます俺は嬉しくなる。
「ふへへ」

「あー、縄酔いすごいな、お前。……今のうちに花瓶させてもらうぜ」
足を吊られて無防備にさらされたアナルに、エクボがズブズブとコンドームを埋める。
「はへ……？」
エクボは手早くそこにカスミソウやミモザを活けていく。
「ぁ、あぁっ」
花が挿れられるたびに俺は唯一自由な右足を跳ねさせる。
鈍く前立腺に当たるんだっての！
「よし、できた。……ほら、霊幻見てみろ」
パシャ、とまたエクボが霊幻を写真で撮る。
「お前は人間からも解放されて、ただの『物』になった。……お前は花瓶だ」
花を活けられた自分を見て。
「ああぁあァアッッッ♡♡♡」
ぞくぞくぞくぅ♡と強烈な痺れが全身に走って、深くメスイキした。
「俺ぇっ♡おれ、おれはぁっ♡かびんっ♡♡♡」
「うんうんうん……いやだめだな思ったより深く縄がキマり過ぎてる。怪我する前に外すぞ」
エクボが焦ったように花を抜き、足を下ろして縄を外し始める。
「あ……」
少し残念に思いながらも、縛りから解放されていく心地よさに、また酔う。
酔いながら、だんだんさっきの痴態が恥ずかしくなってきた。
なんだよ、俺は花瓶、って。どMか、俺は。
「霊幻。……綺麗だったぞ」
だけど、耳元でそう言われながら、足にクッキリと残る縄化粧を触られると、
「また縛って♡」
と言ってしまった。
「おおせのままに」
クックッとのどをおかしそうに鳴らしながらエクボが言うので、翻

弄されっぱなしなのがくやしくて、ぎゅむっと股間を握ってやる。
案の定固くなっていたソコに。
「お、おい、霊幻」
「次は俺がお前を翻弄してやる」
５年間の練習の成果をぶつけてやることにしたのだった。